

特別会員寄稿

尊厳ある認知症ケアの実現をめざして

早稲田大学人間科学学術院
教授 加瀬 裕 子

介護施設における人材不足は、深刻化しています。2016年に公表された報告によりますと、特別養護老人ホームの約半数が

人手不足であり、そのうちの1割が職員不足を理由として、利用者の入所を制限しています。

介護職員の平均給与は上昇したにもかかわらず、離職率は16.7%と他の職業より高く、前年度に比べて0.2ポイント増加しています。(平成28年介護労働実態調査) このように頻繁に人が入れ替わる現状では、サービスの質を保つことは難しくなります。介護現場で頑張っている職員は離職した人の分も働かなければならず、「利用者と思うようにかかわれない」状態で「自分のケアの適切さや安全性についての不安」を感じていることが明らかになっています。つまり、人手不足は良いケアを提供しようと考えている職員のストレスも増大させているのです。

私は一般市民が認知症ケアについての知識を深め、自分が当事者や介護者となることの心構えを持っていることこそ重要であると考え、文科省の科研費補助事業をいただいて、認知症講座を毎月1回開催してきました。講座には約100名の市民が参加登録を行い、毎回50名が講座に参加しています。3年に渡る活動のなかでボランティア集団「ピアところ」も結成され、有志の努力により「思い出ブック」という認知症の方との会話を助けるツールも開発されました。(詳しくは、「とこコミュ」のホームページをご覧ください。) 尊厳ある介護を実現するうえで、「思い出ブック」は役に立ちます。しかし、残念なことに介護施設では、「思い出ブック」を見ながら認知症の方と話をする介護職員はほとんどいません。食事・入浴・排泄などの基本的介護で手一杯なのです。私たちの老後は、大丈夫なのでしょう。

そんな不安を感じていた矢先、スウェーデンのリンショーピン市で介護職員をサポートするシステ

ムに出会いました。私の友人、エルスマリーの紹介で見学させてもらったアスペンという高齢者特別住宅(1970年のエーデル改革によりスウェーデンでは施設は廃止され、特別住宅での介護サービスに変更されました。)に、ラーセンターという認知症学習センターが併設されていました。ここでは、介護職員が認知症ケアの対応困難事例に遭遇した時に、「ケアプランの作成」についての支援を行い、ケア効果の測定を行っています。

スウェーデンでも、認知症ケアの知識があまりない若い人材が介護現場に就職するという、日本と似たような状況があります。先輩の介護職員が、実地で新人を教育すれば、介護以外に教育の仕事が負担となります。また、経験のある介護職員でも対応が難しいケースもあります。そこで、ラーセンターに認知症の行動・心理症状について専門の知識を持った職員を配置し、相談に乗ることが出来るようにしました。リンショーピン市には、60を超す高齢者ケアにかかわるサービス機関があり、ラーセンターには、全市からの認知症ケアの困難事例についての相談が寄せられます。

ところで、私が嬉しかったことには、認知症ばかりでなく、高齢者の文化を大切にすることをリンショーピン市は重視しており、高齢者の「思い出」につながる古い道具、衣服写真を収集・保管するカルチャーセンターを設置していました。「ピアところ」が行ってきた「思い出ブック」と同じ考え方です。カルチャーセンターは、市内の介護職員にこれらの品物の貸し出しを行い、「思い出がたり」を行うことを推奨し、音楽家を高齢者特別住宅に派遣して「思い出の音楽会」を開催します。

このような介護職員を地域で支援するネットワークを所沢市に作り上げることが、目下の私のプロジェクトです。来年3月3日に、エルスマリーとラーセンターの職員カースチンを所沢に招待しました。介護関係者や市民の皆さんと共に、尊厳ある認知症ケアの実現をめざして話し合いたいと考えております。よろしくお願いします。